

平成 29 年度ユネスコスクール年次報告書

1. 学校概要

学校名 宮城県多賀城高等学校 (※正式名称を記載)
種 別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫^{※注1}
 中学校 中高一貫^{※注2} 高等学校
 教員養成大学 専修学校、各種学校
 特別支援学校
 その他 (例: 小中高一貫)
※注1 義務教育学校を含む ※注2 中等教育学校を含む

所在地 〒 985-0831

宮城県多賀城市笠神二丁目 17 番 1 号

E-mail chief@tagajo-hs.myswan.ne.jp

Website http://www.tagajo-hs.myswan.ne.jp/index.html

幼児児童生徒数 男子 398 名 女子 435 名 合計 833 名
幼児・児童・生徒の年齢 15 歳～ 18 歳

2. 報告期間

平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月

※報告書提出時点～平成 30 年 3 月末までの活動は、予定 (見込み) として記載ください。

3. 活動内容

※記入にあたっては、末尾の留意事項も確認ください。

(1) 活動の概要 (800 字程度+活動内容を表す写真数枚)

※チェック事項 1-1、2-1 に対応

当校は、「東日本大震災の被災経験をもとにした様々な活動をとおして、自身の防災意識を高めるとともに、科学的視点から防災・減災を考え、自らが他者と交流する防災教育」を目指して、ESD を防災教育の中心と捉え、ESD の実践を通して批判的に考える力や多面的総合的に考える力の育成を目標としている。

具体的には、①防災学習に係わる活動、②自然科学に係わる学習、③国際理解に係わる活動をプログラムの柱に ESD を行った。

① 防災学習に係わる活動

「世界防災フォーラム」と「ぼうさいこくたい」の防災関係の 2 イベントが 11 月 25～27 日にかけて同時に開催され、本校生徒の代表が参加。本校の防災減災の取組をパネルで展示発表しました。来場した多くの方々が足を止め、熱心に取組についての生徒の説明に耳を傾けていただきました。そんな中、午前小此木八郎防災担当大臣、午後には吉野正芳復興大臣にブースに立ち寄っていただき、両大臣よりそれぞれ励ましのことばをかけていただきました。

また、世界防災フォーラム(国際センター会場)の一環として行われた、宮城教育大学主催セッション「持続可能な開発と防災・減災～教育セクターの役割再考～」にはパネラーとして参加。本校生が街に残る津波の痕跡に「津波波高プレート」を設置する活動や街を案内する「まち歩き」など震災の記憶と教訓を伝承する取組を紹介しました。

② 自然科学学習に係わる学習

東日本大震災では宮城県塩竈市にある浦戸諸島にも大津波が押し寄せ、大きな被害を受けました。例年行われている巡検ですが、今年度は国立研究開発法人海洋研究開発機構(JAMSTEC)の小俣珠乃博士による事前講義を聴講し、翌日災害科学科1年生による塩竈浦戸巡検が行われました。今回の巡検には、昨年に引き続き二度目の参加となる北海道室蘭栄高校から5名の生徒が加わり、地学班と生物化学班に分かれてフィールドワークを行いました。

③ 国際理解に係わる活動

OECD 日本イノベーション教育ネットワーク(ISN)が主催するプロジェクト「地方創生イノベーションスクール2030」に参加しました。2030年に予想される地域の課題を解決するために、日本の中高生が同様の課題をかかえる海外の生徒たちと対話・協働しながらプロジェクト学習に取り組んできました。その成果の発信の場であると同時に新しい教育システムを模索する次のステップに向けてのマイルストーンとして位置づけられ、共同宣言が出されました。学習者である私たち生徒が受動的ではなく能動的に行動し、それを継続させ、周囲の人を巻き込んで問題解決に向けた行動をしていこうという趣旨の共同宣言でした。



①パネル展示の写真



①防災活動の発表の写真



②浦戸巡検の写真



③ISNプロジェクトの写真

(2) 活動の詳細

① 活動内容

※チェック事項 1-2, 2-1 に対応

ア. 活動分野 (複数選択可)

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 環境	<input checked="" type="checkbox"/> 2. エネルギー	<input checked="" type="checkbox"/> 3. 防災	<input checked="" type="checkbox"/> 4. 生物多様性
<input type="checkbox"/> 5. 気候変動	<input checked="" type="checkbox"/> 6. 国際理解、文化多様性	<input checked="" type="checkbox"/> 7. 地域の伝統文化、文化遺産	<input checked="" type="checkbox"/> 8. 人権・平和
<input checked="" type="checkbox"/> 9. 健康・福祉	<input type="checkbox"/> 10. 食育	<input checked="" type="checkbox"/> 11. 持続可能な生産と消費	<input type="checkbox"/> 12. 貧困
<input type="checkbox"/> 13. エコパーク	<input checked="" type="checkbox"/> 14. ジオパーク	<input checked="" type="checkbox"/> 15. グローバルシチズンシップ教育 (GCED)	
<input type="checkbox"/> 16. ジェンダー平等	<input type="checkbox"/> 17. その他()		

イ. 活動を通して育みたい資質や能力 (複数選択可)

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 批判的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 2. 未来像を予測して計画を立てる力
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 多面的、総合的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 4. コミュニケーションを行う力
<input checked="" type="checkbox"/> 5. 他者と協力する態度	<input checked="" type="checkbox"/> 6. つながりを尊重する態度
<input checked="" type="checkbox"/> 7. 進んで参加する態度	
<input type="checkbox"/> 8. その他(自由記入)	

ウ. 活動時間 (複数選択可)

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 教科の時間	<input checked="" type="checkbox"/> 2. 総合的な学習の時間
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 特別活動等	<input checked="" type="checkbox"/> 4. クラブ活動
<input type="checkbox"/> 5. その他(自由記述)	

エ. 使用した教材 (書籍、ウェブサイト、パンフレットなど具体名)

本校作成独自教材 (浦戸巡検のしおり)
スクエア図説地学 (第一学習社)

- ② ユネスコスクールとしての活動を各校の教育課程（指導計画）にどのように位置付けているか。指導内容を適切に定め、指導方法の工夫改善に努めているか。（200～300字程度）

※チェック事項 1-2, 1-3 に対応

総合的な学習の時間に「課題研究」の時間として組み込まれている。当校では防災教育を柱にそれぞれの生徒が防災・減災についてテーマごとに課題解決型の学習を行えるように1・2年生を対象に設定している。1年次は本校で実際におきた震災の経験に基づいた学習を行い、知識を得た上で課題設定がスムーズに行われるよう工夫している。また、指導方法や内容の精査に関してはユネスコスクール（ESD）の委員会を立ち上げて、適宜会議をもち改善していくことができるようにしている。

- ③ 学校全体で組織的かつ継続的に活動に取り組める体制や環境をつくるため、どのような取組を行っているか。（200字程度）

※チェック事項 1-4 に対応

委員会で組織的に取り組んでいくことができることはもちろん、外部機関等からも継続的な支援や対応をいただくことができるように連絡・調整の会議をもっている。また、今後の取り組みのさらなる拡大のためにも「街歩き」という生徒会主体で外部の高校生を招き行う事業や「震災メモリアルデー」と称し、学校全体として外部との連携事業を行っている。

- ④ ユネスコスクールとしての活動の質の向上のための学校活動の評価（内部/外部）の方法・具体的内容と、それによって明らかになった成果と課題。（200字程度）

※チェック事項 1-5 に対応

生徒・保護者・教員に対するアンケートを行い、ユネスコスクールの活動に対する理解度を図った。また、学校評議員会を設置されており、外部からの意見を取り入れることが出来ている。当校ではユネスコスクールになって日が浅いこともあり、まだ保護者や生徒はもとより教員間での認識の共有が不十分な点もあるように感じられる。今後、どのように幅広い共通理解をつくっていくかが課題である。

- ⑤ ESD の推進拠点としての活動成果の発信方法・内容と、発信により得られた効果。(200字程度) ※チェック事項 2-2 に対応

「世界防災フォーラム」や「全国高校生防災サミット 2017」などの全国各地で行われている会議などへの出席を通じて、パネルディスカッションや防災活動の紹介を行った。同時にそれは、他の活動を知る機会でもあり、防災といえば地震・津波など自分の地域のことしか頭になかったものが、異なった災害に目を向けるきっかけとなった。

- ⑥ 学校以外の団体との協働・交流・ネットワーク形成(地域コミュニティ、大学、ESD活動支援センター、ESDコンソーシアムとの連携など)
(200字程度) ※チェック事項 2-3 に対応

海上保安庁との連携授業「水難事故防止教室」、多賀城市大代地区公民館で行われた「防災キャンプ」、東北大学災害科学国際研究所長の今村文彦先生による特別授業、「平成 29 年度全国防災ジュニアリーダー育成合宿」、兵庫県立舞子高校で行われた「阪神淡路大震災メモリアル行事」、『世界津波の日』2017 高校生島サミットへの参加、湘南学園中学校高等学校・兵庫県立芦屋高等学校などとの生徒会交流等が挙げられる。

- ⑦ 国内外のユネスコスクールとの交流・ネットワーク形成(200字程度) ※チェック事項 2-4 に対応

宮城教育大学との連携事業、京都市立紫野高等学校、宮城県仙台二華中学校・高等学校の SGH 研究発表への参加、神戸大学附属中等教育学校との防災活動を通じた学校間交流等が挙げられる。

- ⑧ ユネスコスクールの活動による効果について、特筆すべき（特に強調したい）内容（例えば児童生徒、教員、カリキュラム・教授法、学校経営、地域・保護者との関係など様々な面でのポジティブな変化）（200字程度）
※チェック事項 2-5 に対応

生徒達は入学当初は防災に関する意識は高いものではないが、防災に関する基礎的な知識・技能を習得する一般的な防災教育は普通科、災害科学科両科共通で行い、災害に関する科学的見地を習得する専門的な防災教育については災害科学科で行うことで、防災・減災の先導役としての認識が生まれた。教員においても学習を体系化していくことで、教授法やカリキュラムのブラッシュアップが図られた。

- (3) 平成 30 年度の活動計画（200～400字程度）

有珠山実習（5月）
ハーバード大特別授業（6月）
つくば研修（7月）
浦戸実習（9月）
栗駒巡検（10月）
石巻・女川巡検（11月）
みやぎ防災 Jr. 研修会（12月）
東日本大震災メモリアル Day（3月）